

この度の「東北関東大震災」で被災された方々に、心からお見舞いを申し上げます。一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

11羽そろって 北帰行

去る3月31日8時58分、野生ツル8羽と放鳥ツル3羽、計11羽がそろって、待ちに待った好天に恵まれ無事北帰行したと思われま。これまでで最も遅かった1昨年の3月28日を3日も延長したので本当に心配しました。昭和時代には北帰行は3月上旬と言われていましたが、今や下旬になってしまいました。ツルの様子をよく観察していると確かに飛べない気象になっています。地球温暖化により環境が変化していることをツルは敏感に感知しているのだと思います。

放鳥3羽も過去の例からすると厳しいのではないかと見ていましたが、放鳥2羽（P53,56）は8羽に40秒遅れ、放鳥1羽（P51）はそれから30秒遅れて後を追って飛びました。ツルの旅立ちを見送っていた人々から歓声が上がりました。その後こちらに戻って来ていません。きっと一緒に北帰行したのでしょう。

渡来数も一昨年の4羽から7羽、8羽と増加しています。来シーズンも期待出来るのではないのでしょうか。

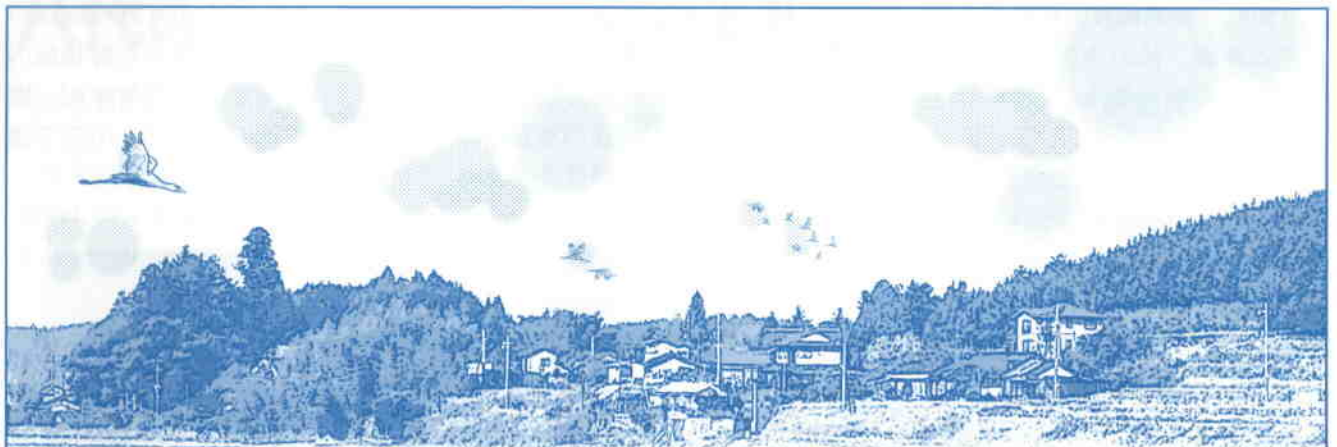
周南市ツル保護研究員 河村 宜樹



野生ツル8羽

写真提供 則安 進さん

6・60・906・6060・96060・906060・96060・906060・96060・906060・9
漫画家 なかはらかせさん から 八代へのメッセージ! No.17



今回ほど、みんなをヤキモキさせたツルたちは…いなかったかもしれない!

思わぬツルたちの死、かと思えば想定外の交尾行動…ラフラフかと思えば、いつの間にか別れたようだし給餌も好き勝手にグループであちらこちらと移動する。

まさに唯我独尊、ナベツルだって人間と同じ個性的なキャラクターの宝庫なのだと思うた。

「こんな習性の鳥です」なんて専門家といわれる人たちが

図鑑の説明文のように、実はひとくくりにはナベツルたちを出来ないような気さえしてきた。

そんなわがままな11羽が、3月31日ちゃんと11羽一緒に北帰行をした。

今日か明日かと、やはり最後まで我々みんなは振り回されつづけた…。



「万羽ヅルと鳥インフルエンザ対策」

特別寄稿

鹿児島県ツル保護会 奈良和憲

「館長、東干拓で弱ったナベヅルを保護したで、保護センターのケージに入れとってナ」と、いつものようにツル保護監視員から連絡があったのは、年末も近づいた12月18日の午前中だった。昼過ぎに保護センターまで走り、ケージの中で目の当たりにしたナベヅルの行動が今季の一連の鳥インフルエンザ騒動の始まりであった。

「館長、これは農薬中毒ではなかな」と、同行した職員が思わず叫んだ。ツルが好きで、これまで30年ほどツルを見てきたが、目の前で繰り広げられる行動はこれまでに見たことがない異様なものだった。ケージの中の衰弱した幼鳥は、首を後ろに向けて後ろに歩く行為を何回か繰り返していた。

翌日、死亡原因調査をお願いしている大学へ連絡をとり高病原性鳥インフルエンザの簡易検査を依頼した。20日早朝に奇妙な行動をするナベヅルの死亡を確認し、昨日死亡した個体と2体を綿密に消毒等を行い、大学へ届けた。簡易検査の結果連絡があったのは午後1時前であった。

「館長、簡易検査の結果、1羽に陽性反応が・・・」

その瞬間、体の中に戦慄が走り、頭は真っ白になった。この後の顛末については、新聞等で報道されたとおりである。

今季の出水平野には12月11日の羽数調査で1万3006羽が越冬していることが確認された。

鳥インフルエンザの発生直後からパンデミックや絶滅のおそれがあると専門家から指摘されたが、結果として3月20日現在ではナベヅル7羽にとどまっている。(残念ながら、市内の養鶏農場1か所に鳥インフルエンザが発生し、約8600羽が殺処分されたが・・・)

この間の対応について概要を記してみたい。

まず、簡易検査のために検体を持参した朝は、本庁へ鳥インフルエンザの検査を受ける旨を連絡し、連絡を受けた本庁では早速、関係部課長で庁内会議が行われた。簡易検査で陽性が出たとの連絡後には、鳥インフル関係部課長を中心に市長を長とする庁内対策会議が組織された。

それから連日、朝と夕方には対策会議が開催され、ツルの状況等を報告するとともに、本部の決定を現場へ伝えた。対策会議は現在では週に2回に減ったが、異常時にはいつでも対応できる体制が整っている。

市としては、ツル及び野鳥への感染拡大防止、死

亡個体・衰弱個体の早期回収・捕獲のための対策として、消毒ポイントの設定、監視の強化、2か所の保護区の給餌場所の拡大、ねぐらの拡大などに努めた。これらの対策は家畜伝染病予防法に基づかない任意で自主的な対策であった。

国の対応も早かった。特に保護区周辺842ヘクタールを国指定出水・高尾野鳥獣保護区に指定し、東干拓の一部を特別保護地区に指定している環境省から、現状把握と対応策のため多くの職員を、また簡易検査、ふん便調査のために大学教授ほか専門家を派遣していただいた。少し小康状態になると、大臣や副大臣、事務次官などにもおいでいただき、養鶏関係者や地元からの要望、意見を聴取された。

県も年末から県内の家畜保健衛生所の獣医師2人を市役所に常駐させ、養鶏農場での感染確認と同時に、法に基づく消毒ポイントの設定、交通規制、鶏の殺処分等を夜中から実施していただいた。実に素早い対応だった。併せて地元養鶏農協の一連の対策は非常に徹底したものであったと聞いている。

市は今回の状況を受けて、とりあえず財政支援のほか、ツル及び野鳥の調査研究施設のツル博物館への設置、検査体制の充実、消毒体制の常態化、関係法の整備、北東アジア各国情報の提供、国際会議の開催などを強く国、関係機関に要望した。



出水はツルの町である。出水市民はツルとともに冬を過ごし、ツルとともに春を迎える。ツルのいない生活は考えられない。なかでもツル羽数調査をする児童生徒たちの悲しみも深く、2月8日には市内27校の児童生徒から寄せられた鳥インフルエンザの終息を願う3万2141羽の折り鶴が、関係者を勇気付けた。

今期の飼育・ 放鳥をふりかえって

今期は、平成18年の飼育開始以降、最大の飼育羽数となる8羽の飼育を行いました。22年3月27日、まさに北帰行のその日に6羽のツルが出水市より移送されてきました。

新旧の移送ツルを同時に飼育する場合、相性等の問題が発生するおそれがあったため、それぞれ別ケージでの飼育を行いました。ツルの数が多い上に複数のケージでのツルの飼育ということもあり、掃除や給餌、監視で飼育員さんには大変苦勞の多かった1年でもありました。それでも、1日でも早く、元気に野性に返すことを目標に飼育を続けてもらいました。

放鳥についても、計画段階では、最大となる6羽の放鳥を予定し、結果として4羽の放鳥を行いました。この放鳥4羽という数も今までで最大となっています。



また、放鳥を2回に分けて実施する取り組みを新たに行いました。第1回目は11月10日に3羽（標識番号；P53, P54, P56）の放鳥を行い、第2回目は12月14日に1羽（標識番号；P51）の放鳥を行いました。

2回目に放鳥したP51については、2月に野鶴との交尾が確認されました。放鳥を始めて今年で5年目となりましたが、野生ツルとの交尾行動の確認はこれが初めてであり、来シーズン八代に再飛来してくれるのでは？との期待が高まっています。また再び放鳥したツルが八代の空を優雅に舞う姿を見たいものです。



もう一つ、忘れてはならないことがあります。今期は飼育、放鳥ツルあわせて3羽のツルが死んでしまったことです。「再び元気になって野性に返す」これは、出水市で保護され、八代で飼育、治療を行う私たちとツルたちとの約束事です。常に最善の方法を模索しながら飼育を進めてきましたが、飼育開始後初めてのツルの死亡は残念でなりません。このツルたちは、八代で客死したツルたちと同じく、古本社にある“えい鶴地”に埋葬されています。

今期は、良いことも残念なことも含め、初めてが多い1年でした。今年の北帰行の今までの記録で最も遅い3月31日。放鳥ツル含め、全てのツルがシベリア方面に向けて飛び立っていきました。またこのツルたちが再び八代に戻ってくることを期待しています。

現在保護センターでは、引き続き2羽のツルを飼育しています。ツルたちを再び野外に帰し、その優美に舞う姿を見られるように、これからも全力で飼育を行って行きたいと思っておりますので応援よろしくお願ひします。



周南市文化スポーツ課 ツル保護担当 増山